

オープンガーデンオーナーの意向に関する研究
-千葉県流山市と長野県小布施町を事例として-

○ 土屋 薫 [江戸川大学] 林香織 [江戸川大学] 下嶋聖 [東京農業大学]
キーワード：オープンガーデン、着地型観光、レジャー政策

1. はじめに

2005年に流山市で千葉県内初の組織的なオープンガーデン活動が始められてから10年になる。このオープンガーデンの運営主体である「ながれやまガーデニングクラブ『花恋人(カレント)』」は、2005(平成17)年5月に結成された。これは、前年11月に流山市で開催されたガーデニングコンテストの表彰式後の交流会において、意見交換がなされたことを直接のきっかけとしている。そして、このガーデニングコンテストというのは、現市長の井関義治氏が2003(平成15)年4月に初当選した際に、都市緑化推進運動の一環として始められたものである。

一方、現在、「栗と北斎と花のまち」として親しまれている長野県上高井郡小布施町では、2000(平成12)年にオープンガーデンが始められている。この背景には、1980(昭和55)年に、潤いのある環境を求めて「町を美しくする事業推進委員会」が発足し、意識的に地区の緑化や花壇づくりが始められたことがある。また1989(平成元)年に、ふるさと創生事業の一環として始まったヨーロッパへの花のまちづくり研修事業も大きな影響があるとされている。

柏市・松戸市・江戸川・野田市に囲まれた流山市は、2005年8月のつくばエクスプレスの開業以来、今や都心まで30分とかからないベッドタウンとして、沿線にマンションが林立している。ただ、今では観光地として脚光を浴びている小布施も、昭和50年代には定住人口の減少に悩んで宅地分譲をはじめ、長野市のベッドタウン化する経験を経て来ている。また小布施の観光の拠点となっている「北斎館」も、当初は「田んぼの中の博物館」として、観光資源としては未知数の存在だった。

こうした実例を見たとき問題点として浮かび上がってくるのが、観光と日常のライフスタイルの線引きである。他者の視線に入るように意識的に自身を掲げ、交流を促進させようとする試みは、産業の関与の如何を問わず観光の原点と言ってもいいだろう。だとすると、日本では自宅の庭を無料で開放して見学させる営みとして定着して来たオープンガーデンも、観光資源の大きな柱のひとつとして位置づけ、検討していく必要があるだろう。またこれは、観光地における地域住民の位置づけを検討する試みを内包しているとも言えるだろう。

本研究は、このような問題意識に立ち、オープンガーデンを行っている庭のオーナーの意向についてとらえることを目的とするものである。なお本報告は、平成25年度採択科学研究費基盤研究(C)課題番号25501015「オープンガーデンマップの設計による観光情報の類別」(研究代表者：土屋薫、研究分担者：林香織・下嶋聖)の一環として行われた調査結果をまとめたものである。

2. 調査概要

調査対象は、2014年に流山市でオープンガーデンを統一公開日(5月18日~20日)に実施した27庭(集合住宅は除く)と、小布施町のオープンガーデンマップに掲載されている126庭である。調査実施期間は2014年9月、留置調査法で回収のみ郵送で行った。

3. 調査結果

単純集計の結果は以下の通りである(流山の回収数23=回収率85.2%、小布施の回収数80=回収率63.5%)。

回答者の属性を見てみると、流山では平均居住年数が30.1年、年齢は60歳代が47.8%と最も高く、家族構成は「夫婦のみ」が52.2%と最も高く、女性の割合が69.6%であった。これに比べて小布施では、平均居住年数が44.0年、年齢は60歳代が43.8%と最も高く、家族構成は「親と子ども」の2世代が31.3%

と最も高く、女性の割合が 55.0%であった。

両者を比較すると、小布施の方が平均居住年数は長い、これは居住地域全体の開発度によるものと思われる。同じベッドタウンと言っても、江戸川の河岸段丘に位置する流山では、昭和における開発が主流であったことが伺える。また年齢構成に関しては、流山において、40 歳代が 0 なのに対して 30 歳代が 4.3%となっている。これは、流山調査の対象が「ガーデニングクラブ」の会員であることが原因であると思われる。また家族構成に関しては、小布施が「親と子ども=32.5%」「3 世代家族=31.3%」「夫婦のみ 26.3%」となっているのに対して、流山では「夫婦のみ=52.2%」「親と子ども=43.5%」「3 世代家族=0%」となっていることから、首都圏周辺での核家族化の影響が出ていると思われる（図 1）。

次に、自宅の庭を公開している理由について尋ねたところ、流山では「同じ趣味を持つ人たちと交流したいから」と答えた人が 52.2%と 1 位で、「住んでいる街の良さを知ってほしい」が 17.4%と 2 位だった。これに対して小布施では、「住んでいる街の良さを知ってほしい」が 35.0%と 1 位で、「人にすすめられて」が 25.0%と 2 位だった。ここにも、趣味縁から成り立っている流山と地域づくりから出発している小布施との違いが現れている、と言えるだろう（図 2）。

また、実際に来訪者にされた質問について尋ねたところ（複数回答）、流山では「草や木の名前や種類」が 100%、「花や木の育て方」が 87.0% だったほか、「ガーデニングに関する用品の購入先」「食事や休憩をするところはどこか」「駅やバス停への生き方」が 56.5%と高くなっていた。これに対して小布施では、「草や木の名前や種類」が 73.8%、「花や木の育て方」が 43.8% だったほか、「花や木の苗や種をどこで購入しているか」が 13.8%、「ガーデニングに関する用品の購入先」が 8.8% と低くなっているところが特徴的だった。この結果は、先に挙げた趣味と地域づくりへの関心の違いが、来訪者の側にもある程度浸透している現れとしてとらえることができるだろう（図 3）。

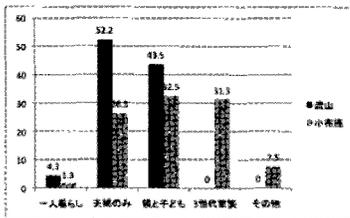


図 1 同居している家族構成

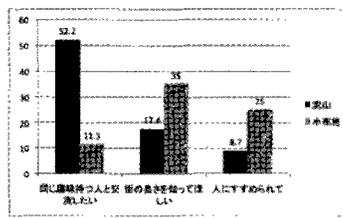


図 2 自宅の庭を公開している理由

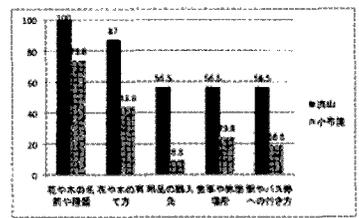


図 3 来訪者にされた質問

4. まとめ

今回の報告は単純集計レベルであるが、同じく自宅の庭を無料で公開するオープンガーデン活動であっても、その成り立ちや運営主体によって、状況の異なることがわかった。またその違いの軸として、趣味と地域づくりへの関心という 2 つの方向性が発見できた。こうした知見を出発点として、庭のオーナーと来訪者が求めているもののマッチングを図っていくことが、ガーデニングという個人のレジャー活動の充実においても、着地型観光のひとつのかたちであるオープンガーデンという交流事業の充実においても、ともに求められるだろう。また、その両者が密接なつながりを持っていることに、今後のレジャー政策の方向性が見出されると思われる。

参考文献

- [1] 土屋薫・林香織「『おもてなし』の表出にみられる地域コミュニティと景観形成に関する考察 —長野県小布施町における観光をめぐる状況から—」、江戸川大学研究紀要、24 号、2014 年 3 月 15 日
- [2] 小久保温・土屋薫「散策型観光支援モバイル Web アプリの開発と実証実験～ながれやまオープンガーデン 2013、第 4 回モノマチの事例～」平成 25 年度第 1 回芸術科学会東北支部研究会、第 5 回芸術科学会東北支部研究会、2013 年 7 月 14 日
- [3] 土屋薫「着地型観光支援ツールとしてのデジタルマップの可能性 —観光情報とルート選択に関する考察—」、江戸川大学研究紀要、23 号、2013 年 3 月 15 日